

# 幼児の自己統制行動について (I)

——— 因子分析を中心として ———

○ 下山 陽子 (兵庫教育大学大学院) 井上 厚 (兵庫教育大学)

## 目的

Kendall & Wilcox (1979) は、小学校3～6年生の自己統制能力を評定するために、33項目からなる自己評定項目を作成している。一方、笹野 (1983) は、0～6歳の乳幼児を対象に30項目からなる評定項目を用いて、彼らの自己統制能力とその発達を検討している。しかし、両者は評定項目においても検討方法においても異なっている。そのため、本研究では、2つの研究を参考にして、幼児の自己統制能力を評定するための項目を検討することを目的とする。

## 方法

<1> 被験児 兵庫県内の公立幼稚園5園、岐阜市内の私立保育園1園、名古屋市内の私立幼稚園1園、計7園の各年長組からランダムに選ばれた男女5名ずつ (1組のみ例外、男4名、女9名)、合計143名 (男69名、女74名) である。年齢範囲は5歳5カ月～6歳4カ月、平均年齢は5歳11カ月である。

<2> 調査項目 Kendall & Wilcox (1979) が小学校3～6年生を対象にして作成した自己統制評定項目のうち、幼児にも適用できる31項目と、さらに、笹野 (1983) が作成した乳幼児用の調査項目のなかから、内容が重複する項目を除いた13項目を加えて、計44項目の質問紙が作成された。各項目の内容および表記については、数名の幼稚園教師によって十分検討された。

<3> 手続き 所属する幼稚園あるいは保育園における観察を通して、担任が上記44項目すべてについて各被験児を評定した。評定するに当たっては、「よくあてはまる」「少しはあてはまる」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の4段階評定尺度を用い、それぞれに、3, 2, 1, 0の数値を与えた。

## 結果と考察

<1> 上記44項目の評定結果を、主因子法を用いて第V因子まで抽出し、基準化バリマックス法によって得られた回転後の因子負荷量をTable 1に示す。この結果から、第IからV因子を次のように命名した。

第I因子に高い負荷量を持つ項目を次にあげる。

- No.16 : 当番などの仕事を忘れる。
- No.42 : 教えられたことを理解し実行できる。
- No.17 : 遊びや活動に熱中できない。
- No.41 : 集団遊戯で自分の役割を果たせる。

No.23 : 気が散りやすい。

No.18 : 好きな物は明日まで待ってでも手に入れる。

No.1 : 約束を実行できる。

No.26 : 課題に最後まで取り組める。

No.31 : ひとつのことに集中して取り組める。

No.13 : 何回も指示されないと行動できない。

No.7 : 自分で決めたことをやり通せる。

以上の内容から、第I因子は「意志的行動」の因子と名付けることが適当であると考えられる。

第II因子に高い負荷量を持つ項目を次にあげる。

No.20 : 友達の邪魔をする。

No.19 : 友達の持ち物を横取りする。

No.28 : 遊びやゲームをかき乱す。

No.9 : 欲しいと思ったらすぐに手を出す。

No.27 : 次々に興味に移る。

No.6 : 友達の話を途中でさえぎる。

以上の内容から、第II因子は「社会的行動統制」の因子と名付けることが適当であると考えられる。

第III因子に高い負荷量を持つ項目を次にあげる。

No.39 : 言いかければがまんでできる。

No.32 : 大人に注意されるとやめられる。

No.10 : 一列に並んで根気よく待てる。

No.5 : 大人が答えるまで待てる。

No.38 : 大人に待つように言われると待てる。

No.8 : 親や先生の指示に従える。

以上の内容から、第III因子は「外的統制」の因子と名付けることが適当であると考えられる。

第IV因子に高い負荷量を持つ項目を次にあげる。

No.2 : 自分から遊びや活動に参加できる。

No.44 : したいことをすぐ行動にあらわす。

これらの内容から、第IV因子は「積極性」の因子と名付けることが適当であると考えられる。

第V因子に高い負荷量を持つ項目を次にあげる。

因子 性	I			II		
	$\bar{X}$	SD	t	$\bar{X}$	SD	t
男	21.043	6.203	1.568	7.507	4.053	** 3.379
女	22.676	6.156		5.432	3.214	

\*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

No. 4 : 感情の起伏が激しい。

No. 3 : なだめられないと気が静まらない。

以上の内容から、第V因子は「情緒的統制」の因子と名付けることが適当であると考えられる。

<2> 各因子ごとに、性差について検討した結果をTable 2に示す。これによると、第II因子の社会的行動統制、第III因子の外的統制および第IV因子の積極性に、有意な差が見い出された。すなわち、社会的行動統制および外的統制の両能力において、男児よりも女児の方が優れており（第II因子の因子得点は、高いほど社会的行動統制ができないことを意味する）、積

極性については、女児よりも男児の方が優れていた。

<3> 因子分析を行った結果から、自己統制行動には、意志的行動および積極性という自分で行動を決定する側面と、社会的行動統制、外的統制、および情緒的統制という、自分の行動や感情を調節する側面とが同時に存在するように考えられる。これらの側面が年齢発達の見てどのように変化するかについて、本研究の結果得られた調査項目を用いて異年齢群間の比較をすること、および、自己統制に関する他の測定との関係についても検討することが今後必要であろう。

Table 1 回転後の因子負荷量

No.	I	II	III	IV	V	2乗和	No.	I	II	III	IV	V	2乗和
1	.588	-.322	.543	-.069	.074	.754	24	.381	-.147	.541	-.312	-.005	.557
2	.346	.139	-.009	.649	-.109	.572	25	.432	-.349	.485	-.047	-.076	.551
3	-.312	.296	-.151	.035	.592	.558	26	.531	-.085	.261	-.168	-.379	.585
4	-.110	.434	-.254	.134	.643	.697	27	-.335	.557	.045	.442	.068	.624
5	.150	-.365	.629	-.147	-.004	.574	28	-.318	.715	-.290	.099	.072	.713
6	.101	.548	-.269	.300	-.039	.474	29	.541	-.153	.428	-.343	-.122	.631
7	.552	.020	.178	-.069	-.449	.543	30	-.274	.299	-.220	.458	.041	.425
8	.514	-.288	.617	-.002	-.030	.729	31	.567	-.135	.210	-.122	-.369	.535
9	-.090	.580	-.209	.266	.219	.506	32	.080	-.403	.657	-.096	-.155	.635
10	.250	-.337	.640	-.099	.037	.597	33	.346	.111	.370	.164	-.343	.413
11	-.344	.459	-.438	.321	.022	.625	34	.237	.272	.471	.256	-.160	.443
12	.048	-.530	.496	-.106	-.029	.541	35	-.015	.009	.044	-.071	.307	.102
13	-.569	.269	-.298	-.091	.022	.493	36	.397	-.312	.537	-.108	-.077	.561
14	.045	.521	-.241	.176	.251	.426	37	.301	-.472	.529	-.000	-.200	.633
15	-.368	.493	-.297	.100	.076	.482	38	.310	-.404	.626	-.089	-.078	.664
16	-.674	.240	-.362	-.014	-.017	.643	39	.196	-.314	.678	-.081	-.243	.662
17	-.617	.181	.007	-.335	.234	.581	40	.497	-.454	.445	-.077	.258	.658
18	-.593	.016	-.023	-.008	.138	.372	41	.609	-.051	.328	.236	-.040	.538
19	-.190	.747	-.269	.095	.105	.687	42	.642	-.153	.421	.078	-.019	.619
20	-.239	.809	-.250	.074	.085	.786	43	.222	-.417	.490	-.124	-.238	.535
21	-.458	.469	-.183	-.010	-.012	.463	44	.044	.402	-.116	.650	.013	.599
22	-.489	.434	-.136	.300	.022	.552	EIG.	7.139	6.934	6.657	2.391	1.976	
23	-.604	.527	-.165	.232	.183	.756	PCT.	28.4 %	27.6 %	26.5 %	9.5 %	7.9 %	

Table 2 因子得点の性差

III			IV			V			全体		
$\bar{X}$	SD	t	$\bar{X}$	SD	t	$\bar{X}$	SD	t	$\bar{X}$	SD	t
12.783	3.827	* 2.458	4.174	1.382	* 2.484	1.319	0.931	0.124	46.232	7.036	0.334
14.216	3.076		3.622	1.257		1.338	0.880		46.676	8.617	